

第19回研究会 I N 山形！

今回は、初の試みで、新庄市から出て、山形大学にて授業研究会を開催いたしました。2日間にわたり、初日の22日(土)は『第3回やまがた教員養成シンポジウム』に参加しました。その後、懇親会を開きました。ご準備をしてくださった樋渡先生や森田先生、また江間先生も加わり、盛大に行いました。一泊した後、23日は山形大学地域教育文化学部の教室をお借りして、第19回授業研究会を行いました。

『第3回やまがた教員養成シンポジウム』から

場所：山形グランドホテル

第3回 やまがた教員養成シンポジウム

山形大学
YAMAGATA UNIVERSITY

教師の学びの質を考える —実践と省察をめぐって—

<基調講演>
13:15-14:15
佐藤学(学習院大学教授・山形大学客員教授)
専門家としての教師の学びと省察

<シンポジウム>
14:30-17:00
学校というフィールドで学ぶとは
—教育実習やスクールサポーター制度で学んだことを通して—

司会 森田 智幸(山形大学大学院講師)

<報告>
第一部 学生の学び
鈴木 聖太(山形大学3年)
今野 彩夏(山形大学4年)
橋本 将(東北文科大学4年)
遠藤 香葉(山形大学大学院2年・学部卒業生)
石田 夢(山形大学大学院2年・視聴院生)

第二部 大学・実習校の教員の学び
樋渡 典千代(山形大学大学院教育実践研究科准教授)
斎長崎 芳晴(山形大学附属小学校教諭)
小沼 裕佳理(山形県教育庁義務教育課指導主事)

<指定討論>
佐藤学(学習院大学教授・山形大学客員教授)
中井 義時(山形県教育庁教育次長)

<意見交換>

2013年 12月22日(日)
13:00-17:00

場所：山形グランドホテル
※当日はホテルの駐車場をご利用下さい。

主催：山形大学大学院教育実践研究科
山形大学地域教育文化学部
公益財団法人やまがた教育振興財団
共催：東北文科大学

◆当日は12時30分に受付を開始します。
◆参加費は無料です。参加を希望する方は、以下のメールまたはFAXに氏名と所属と連絡先を記入して申し込んでください(定員:150名)。
◆申込は2013年12月18日(水)を締切とさせていただきます。

問い合わせ先
山形大学地域教育文化学部事務室兼事務担当
TEL: 023(628)4304 FAX: 023(628)4313
E-mail: kyosoumu@jm.ij.yamagata-u.ac.jp
http://www.r.yamagata-u.ac.jp/gstt/

【基調講演】佐藤学教授

専門家としての教師の学びと省察という演題での講演でした。

1 教師の危機＝基盤の崩壊

これまでの、教員の待遇低下と、インフォーマルな専門文化（授業研究会、校内研究、研究サークル）の崩壊による、教師の質の危機。加えて、教育学部・教育大学の危機

2 21世紀の教師＝「学びの専門家」

- ・知識基盤社会への対応
- ・多文化共生社会への対応
- ・格差リスク社会への対応
- ・成熟した市民社会への対応

※P I S S Aは将来の必要となる力を図ろうとしていた。

3 教師の質の危機＝高度化と専門職化の遅れ

小学校4年担任教師の教育歴、中学校2年数学教師の教育歴を、世界各国と比較すると、先進国ほとんどは、修士レベル。日本は

※シンガポールも低いですが、これは国立教員養成で対応しているため、レベルが高い。

4 数学の授業に対する生徒の確信

他国と比べて、日本の生徒は「わかった」という確信をもっていない。この数値と、教師の教養レベルとに相関がある。

5 理科教師の研修内容（2011年国際調査）

日本の教師の研修は批判的思考と探求技能が欠落している。

グラフを見ると、先進国で日本は「批判的思考と探求技能」が最低。これは、授業において、子どもの探求を促進する部分が弱いことを表している。

日本の教師は、思考・探求を求めているが、それを個人学習で求めている矛盾がある。

6 教師教育の構造

教師教育の内容は「市民的教養」「教科の教養」「教職教養」「実践研究」の4つで構成されている。

7 教師教育の専門性基準

今、教師のプロフェッショナルスタンダードがないのが問題。学習院大学では、H25年にスタートさせる教育学専攻に、このスタンダードを作成している。

8 専門家像の転換

専門家の実践＝「科学的技術の合理的適用」から「行為の中の省察へ」

経験から学ぶ、事実から学ぶ⇔理論から学ぶ

9 教える専門家から学びの専門家へ

教師の成長＝職人としての成長と専門家としての成長の両方が必要。

※職人とは・・・技とスタイルを持っている：模倣でしか学べない部分。

技術 (technique) でも、技能 (skill) でもない。

※技術：知識として教えることができるもの。

※技能：トレーニングでうまくなるもの

専門家とは、探求と経験によって獲得するもの：知識と理論の統合

10 新しい授業研究による教師の学びの共同体の創造

新しい授業研究＝課題のデザインと学びのリフレクションの研究。

※授業でつぶれる子は、必ず一人で孤立した学びが原因

プランとデザインの違い：プランは授業前に決定されている。デザインは、授業過程においても構成され続けている。(積木遊びの姿と同じ)

※日本の授業のほとんどは、わかりきったことをくどくど説明する授業になっている。子どもが夢中になって学ぶには、教科書レベル以上のジャンプの課題が必要。

11 学びの成立要件

グループ学習の8割は、わかったことの話し合いになっている。学びとは「未知との探求」であり、静かな探求。つぶやきやぼそぼそが教室に表れてくる。

『第19回授業研究会』から

参加者6人＋大学院生3人、森田先生、樋渡先生

山梨県の古屋先生の社会の授業「鎖国」のビデオを視聴して話し合いました。

・ふんだんな資料を、タイミングよく古屋先生が配布します。資料の内容は、古書などもあり小学生にとってはレベルが高い。子どもたちは、国語辞典を片手に調べていきます。

・この授業のノートはほとんどとりません。家で、「今日の授業で学んだこと」を書いてきます。内容がすごい。日頃の古屋先生の、粘り強いノート添削があることが裏付けとしてあります。

・4人グループで最初から最後まで進んできますが、グループ学習ではありません。グループ隊形で、個人で学びを進めていきます。全体の共有でもそのままの隊形。子ども達の会話の方向性は、相手の子どもに向かっての語りです。決して先生に向かっての話はありません。

★古屋先生の授業は、いつ拝見しても素敵な授業ですね。また、学ぶことが多いです。こんな授業を行っていきたいものです。それには、その学校での、研究を推進する仲間づくりや、いまだに学校文化を支配している、教え込み、個別学習で学力は上がるという考えをどう改革していくか、参観者の悩みはつきませんでした。

今年最後は、本当に楽しい研究会でした。たまには場所を、こんな形で外に飛び出して、新しい方々との交流の中で進めるのは有意義でした。まさに、学び合いを地で行っている感じです。忙しい中ご準備していただいた樋渡先生、森田先生お世話様でした。

そして、会員の皆様、今年一年ありがとうございました。



戻る